小林陽子先生　伝説の道徳授業

皆さんは小林陽子先生をご存じだろうか？

小林先生は「道徳授業の名人」と言われた方である。息を呑むような授業をいとも簡単になさり、道徳教育を志す若者の憧れの的であった。

平成 3 年(1991 年)元旦、小林陽子先生から年賀状が届いた。そこには「1 月 16 日(水)に最後の研究授業をします。よかったら来てください。」と書かれていた。

先生とは研究会などで何度もご一緒させていただいていたが、先生のご授業はまだ見たことがなかった。3 月で定年退職をされるとなれば、もう 2 度と名人の授業を見ることができない、それでは一生悔いが残ると思い、休暇をとって品川区立清水台小学校に出かけた。

授業の実際　（夢中で記したメモをもとに、授業の実際を再現した。ただし、大変危険なので、特に初心者は形だけ真似するようなことは絶対しないでいただきたい。）

授業会場は広目の視聴覚教室、その側面には 2 段重ねの雛壇がコの字形に配置されている。参観者は壇上から授業を参観するいう配慮だ。

私が教室に着いた時にはすでに満員（160 名の参観者だったとのこと）で、その中には教科調査官になられたばかりの押谷由夫先生や東京大学教授古畑和孝先生のお姿もあった。私は仕方なく一番前の黒板の横、つまり小林先生のすぐ隣で授業を前から参観することになった。厚かましいとは思うが、まさに特等席だった。

1 年生の子供たちは椅子だけの席だった。

授業前、先生と子どもたち 37 名は音楽の先生が弾くピアノに合わせて 2 学期に演じた学芸会のオペレッタを身振り手振りをつけて次々に歌っていく。

チャイムが鳴った。

（T；小林先生、C；子供）

T　さあ、始めましょう。小林先生の声、聞こえなかったでしょ、でも今は聞こえるでしょ。腹式呼吸をしたからよ。腹式呼吸をすると聞こえる声になるのね。

（子どもたちは立ち上がって腹式呼吸の練習をする。）

発声法の練習をしましょう。（発声法の練習をする。）

T　今日は「ジョンが…」というお話をします。（登場人物 5 人の名前をカードで紹介）

心を動かしながら聞いていてください。（自作資料の読み聞かせ、心に染みる･･･。）

ジョンが・・・

かおりさんは、けさ、泣きながら学校に来ました。

校門のところで小林先生が、「どうして泣いているの？」とたずねました。

かおりさんは答えようとするのですが、なみだがポロポロ出てきて何も言えません。

小林先生は

「きっとねぼうして、お母さんにしかられたにちがいない」

と返事のできないかおりさんの顔を見ながら思いました。
　そして、心の中では「一年生なのに泣いて学校へ来るなんてこまった子だわね」と言いました。
　教室に入ってから、かおりさんが連絡帳をもってきました。とても小さな声で
「すぐ読んでください。」
と言いました。お母さんがけさ、いそいで書いたらしい長い手紙です。
　先生もいそいで読みました。その手紙をいそいで読んで、先生はびっくりしました。
　かおりさんのなみだは、おねぼうのなみだではなかったのです。かおりさんのなみだは、しかられたなみだではなかったのです。
　こう書いてありました。

　きのうの夕方からわが家のジョンが急に元気がなくなり、何も食べなくなってしまいました。その上、立とうともせず、ぐったりしているのです。かおりと私が「ジョン、ジョン、どうしたの？」と声をかけても、力なく目をちょっとあけるだけです。しばらくして、あまりようすが変なので、ジョンをだいてお医者さんにつれていきました。
　いつものんびりしているかおりですが、この時は、ジョンのすきな毛布にジョンをくるみ、私よりはやく走りました。
　お医者さんは、ぐったりしているジョンにちょうしんきを当てながら、ていねいにみました。げんいんがなかなかみつかりません。かおりも私もジョンをはげましながら、お医者さんが「なあに、大じょうぶですよ。すぐなおります」といってくれるのをいっしょうけんめいまちました。やっと病気がみつかって、ちゅうしゃをしました。しばらくすると、ジョンがなきました。いつもよりは元気のない声でしたが、少しよくなったようです。
　かおりと私はほっとしました。うれしくなって、ジョンの体をじっとおさえました。かおりが
「ジョンの体って、とてもあったかい！」
と言いました。いつも遊んでいるとき、体にさわっているのでジョンの体があたたかいということはよく知っているはずですのに、この時は、あたたかいということを強く感じたようです。私も思わず、大きくうなずきました。
　しかし、お医者さんは、とてもむずかしい顔をしたまま、ジョンをじっと見ています。
「犬にとっては、たいへんわるい病気です。うまく助かるといいけれどー」
　それから四時間ぐらい、お医者さんはジョンのそばをはなれませんでした。かおりも私もそのままジョンのそばにいて、ジョンをはげまし続けました。ジョンは時々目をあけて、私とかおりを見ています。「そばにいてくれてうれしい。ぼく、がんばるよ！」という目でした。
　元気になったように見えたジョンでしたが、八時ごろ、
　本当に死んでしまいました。ジョンの好きだった毛布にくるんで、ジョンを家に

つれて帰りました。
　しばらくして、お父さんも会社から帰ってきました。
「ジョンが　つめたくなってしまった。」
お父さんはジョンの体に手を当てて、ふるえる声で言いました。
　かおりは　ベッドに入ってからも「ジョンが…」と言い続けていて、よくねむっていません。
　一人っ子のかおりにとって　ジョンはかおりの兄弟だったのです。けさになっても
「ジョンは死んだのね。本当に死んでしまったのね。ジョンの体はもう　あたたかくならないのね。」
と泣いています。
　泣き顔で、心も泣いていますので、よく勉強できないかもしれませんが、きょうのところはおゆるしください。

　こう書いてありました。

（小林陽子作）

T　どうでしたか？
（指名はせず、子供たちがタケノコのように次々に立って発言していく。）
C　死んだジョンがかわいそうだと思いました。
C　ジョンも死にたくなかったと思います。
C　ジョンは、かおりさんがどうして死んじゃったのと言っています。
C　ジョンが死んで、私も泣きたくなりました。
C　ジョンが死んだら、かおりさんもかわいそうだと思います。
C　ジョンも病院で死にたくなかったのに死んだから嫌だったと思います。
C　元気なジョンが死ぬなんて思いませんでした。
C　お墓を作ってあげればいいと思います。
C　ジョンは頑張ったと思います。
C　かおりさんは何日も泣いたと思います。
C　ジョンが死んだことをお医者さんも不思議に思っていると思います。
C　かおりさんは兄弟が死んで悲しいと思います。
C　かおりさんは「どうして死んじゃったの」といったと思います。
C　ジョンが死ぬとは思いませんでした。
C　ジョンが死ななければ、かおりさんはずっと笑顔だったと思います。
C　ジョンが死ななければ、かおりさんはずっとジョンと遊んでいたと思います。
C　ジョンはやるだけ頑張って治してみると言ったと思います。
C　かおりさんは毎日眠れなかったと思います。
C　かおりさんは、ジョンが死んでから一人ぼっちでさみしいなと思ったと思います。
C　ジョンが死ななければ、かおりさんはいつも元気でいれたと思います。
C　かおりさんはお墓に毎日行ったと思います。

C　ジョンが死ななければ、かおりさんは毎日元気で楽しく暮らしたと思います。
C　かおりさんは寝ないで泣いたと思います。
C　かおりさんはもう学校へ行きたくないと思ったと思います。
C　３人は元気でないと思います。
T　死んだ話ばっかり。　お医者さんは、お父さんはどうでしたか？
C　お医者さんはどうすれば治るかなと思ったと思います。
C　死ぬ前はみんなも一緒に仲良く暮らしたと思います。
C　お父さんはジョンが死ぬなんて思わなかったと思います。
C　お医者さんは間に合わなかったと思ったと思います。
C　お父さん「お母さん、かおりさん」（※記録できず‥）
C　お医者さんはドキドキしながらいたと思います。
C　お医者さんは迷ったと思います。
C　お父さんはびっくりしたと思います。
T　死ぬってことは、［いのち］がなくなる、［こころ］がなくなる。いのちって、こころって、ドキドキ、あったかい。
　皆さんの周りに　触ると温かいものがあるでしょうか。
（C　ほっぺ、椅子、ピアノだって・・「本当だ、ピアノあったかいよ」の声。木、動物、植物・・）
　普通、触ると冷たいのに、心で触ると温かい。
T　温かい生命を大切にしていますか。
C　あまり大事にしてきませんでした。消しゴムを踏んだり、色鉛筆を落としたとき、ごめんねも言わずに使ったからです。
C　私も大事にしていませんでした。時々、色々な草を引っ張ったりするからです。
C　木が生きているのによじ登ったりして、謝らなかったから大事にしていませんでした。
C　草をいつもとってしまいました。
C　ノートを落としたとき知らん振りをして踏んだりしました。
C　ノートや鉛筆を使いっぱなしにしました。
C　ぼくは下敷とか筆箱を落として行ってしまいました。
C　私は物をもらうと大事にします。縫いぐるみを大事にして一緒に遊んでいます。
T　自分はどうですか？自分を大切にしていますか？
（一人一人の胸に手を当てて聞いていく。「大事にしている」「あまり大事にしていない」などの声が返ってくる。全員を回ったところで）
T　生命はとても温かいということを体験してもらいます。
（飼育委員会の６年生児童６人が兎を抱いて登場。列ごとに一人一人に兎を抱かせていく。今までに生活科などで兎に触れた経験があるのに、「本当だ」、「熱い！」の声。あらためて生命は温かいことを実感したのだろう。そこで授業は終了した。主題名は「あたたかいいのち」だった。）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

［授業後、小林陽子先生のご講話があった］

・　生命を大切にすることをいくら強調しても、しすぎるということはない。
・　低学年の生命の指導は、人、物、動

植物すべてに関係する。

○「よい授業」とは、「**子どもが主役になる授業**」のことだと考えている。

よい授業をするには条件が２つある。１つは「子どもがいい子であること、それも学級全員がいい子であること」、もう１つは「いい先生であること」

今日は「いい先生」について話すのは恥ずかしいから、「いい子とは」について話す。

「いい子とは」

① 主役・脇役を自由に使いこなすことができる子。

② 学級は、年齢に応じた知的集団でなければならない。

(1) 自分の考えを必ずもつ子

(2) 品位のない話には乗らない子（先生自らが乗るなど、もってのほか）

③ 感動できる子

(1) 資料の内容に感動できる子

(2) 友達のやったことに感動できる子

(3) 先生の指導法に感動できる子

④ 自己を素直に見つめることができる子

心の存在を教える。自己を見つめることができない子が多い学級へ補教などで行くと、なぜか寒々しく、空しい気持ちになる。心が扱われていない学級に多い。自分を振り返る習慣形成が大事である。

⑤ 自分が責任をもって授業を創る子

遊ばない、邪魔しない、いい顔で参加する。

いい道徳の授業は大騒ぎな授業なんかじゃない。資料と子どもと先生が三つ巴になっている授業のことだと思う。

［広瀬久先生の**ご講評**の要旨］

◇ 子どもを大事にしてくださる先生が一番。

◇ テクニックではない、先生の心を伝えていくことが大事。

◇ 心の教育は、心でしかできない。

◇ 日頃から基本的な生活習慣の育成を大事にしていく。

※ 小林先生は「**いい子とは**」についてだけお話しされたが、こういういい子を育てる先生が「**いい先生**」なのだと思った。子供は育てなければ育たない。

※ 手書きの学習指導案をワープロで打ち直した

道　徳　学　習　指　導　案

平成３年１月 16 日（水）第５校時
品川区立清水台小学校
１年 37 名(男子 19 名、女子 18 名)
授業者　小林陽子

１．主題名　　あたたかい　いのち　　3-⑵

２．主題設定の理由

ア．ねらいとする価値（学習指導要領から全文を引用）

3　主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること。

⑵　生命を大切にする心をもつ

生命の大切さに関するものであり、生命あるものすべてをかけがえのないものとして尊重し大切にしようとする児童を育てようとする内容項目である。主に、「第3学年及び第4学年」では3の⑵に発展し、「第5学年及び第6学年」では3の⑵に発展している。

生命の大切さはどれだけ強調してもし過ぎることはない。すべての道徳性は、生命が大切にされてはじめて成り立つものである。その生命も人間だけではなく、生きているものすべての生命に対する尊重の精神が必要である。

この段階においては、指導にかなりの工夫を要するが、例えば動植物にやさしく接し、その成長や変化、死などを通して、すべてのものに生命があることに気付かせたり、そこから自分の生命を大切にすることを教えたりすることも可能である。

イ．児童の実態

物の豊かな社会で育てられた子供であるためか　ものを大切にするということを知らない1年生である。初めての道徳の時間に「心」の存在を教え、その心は人間ばかりでなく動植物、身のまわりの物にも存在することを意識させてもいる。学級経営全体の中で、心あるもの総てを大切にするよう指導を続けているが、言われれば気付く程度で、本当に大事にするまでには育っていない。また、友達の心を軽んずる子供は動植物、物にも冷ややかであることが多い。この心の存在をどう命に転移させていくかを本主題で考えてみたい。

エ．資料　　資料名「ジョンが…」

1年生のかおりの家で大事に飼われていたジョンが急死する。その死に至るまでのかおりたちの態度、死を悲しむ家族の心をとおして、失った生命は二度と戻らぬことのきびしさを感じとらせていきたい。とともに　あたたかい生命を大切にする心へとつなげる糸口とする。

3．ねらい

すべてのものに生命があることに気づき、それを大切にしようとする心を育てる。

4．展開の大要

主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
1．大きな声を出す練習をしましょう。 ◦たくさん吸って、大きな声を出そう。 ◦みんなに聞こえる声を出したいなあ。	◦腹式呼吸と発声・発音練習をすることによって、雰囲気づくりと各自の心の存在に気づかせる。
2．先生のお話を聞いて　みんなで考え合いましょう。 ◦心でお話を聞く。 3．どうでしたか。 ◦ジョンに対する かおり お母さん お医者さん お父さん の気持ち	◦資料「ジョンが…」を読み聞かせる。 登場人物の紹介をした後、ゆっくり読み聞かせる。 ◦感想を自由に発表する形で話合いをすすめさせる。 教師がその結果を板書し、ジョンの死をいたむかおりたちの気持ちに気づかせる。又、ジョンの命と人間の命を全く同じように考えているか

◦人間の心がわかるジョンの気持ち 4．みんなの周りにもさわるとあたたかいものがあるでしょうか。 ◦人間　◦植物　◦自然 ◦動物　◦物 5．あたたかい生命を大切にしていますか。 ◦とても大切にしている ◦少しは大切にしている ◦あまり大切にしていない ◦大切にしようと考えたこともない	おりの心にふれる。 ◦ 心の手で触れる、即ち命がある物いろいろに気づかせていくように助言する。 ◦ 今まで生命あるものを意識し、それを大切にしていたかどうかをふりかえらせることによって、生命を大切にしようとする心を育てていく。
6．生命はとてもあたたかいということを体験してもらいます。 　飼育委員のお兄さん、お姉さんに教えてもらいます。	◦ 大切にしようとしなければあたたかさはわからない。生命がなくなればあたたかくなくなるという体験をとおして、生命を大切にしようとする心を強く育てていく。

「小林陽子先生の最後の授業と講話」に寄せられた感想

H30.01.22（文責：後藤　忠）

A 氏

若手教員（若手に限りませんが）は、授業の基礎・基本を身に付けるとともに、遥か彼方にある名人の授業に憧れることが重要である、そう私は思っています。

「憧れ」は授業改善への大きなエネルギーを生み出します。「あの名人の境地に立ってみたい」という思いです。しかし、やればやる程、その名人の境地は自分から遠ざかっていきます。名人の「凄さ」が本当に分かってくるからです。それでもその境地を目指す。いや、だからこそ、その境地を目指す。そんな「授業の職人」を育てることができたらと、傲慢ですが思っています。

今回、彼方にある名人の先生の授業をお示しいただいたことで、目指すべき「境地」のようなものを描くことができます。それには、後藤先生が再現された「授業ドキュメント」の分析は必須になります。分析したからと言って「できる」ようにはもちろんならないのですが、まずは第一歩です。

私は、「死ぬってことは、［いのち］がなくなる、［こころ］がなくなる…。」から「**自分を**大切にしていますか？」という発問に至るまでの組み立てに唸りました。そして最後の「温かさ」の実体験によって、子供は**自分自身も含めた「いのち」の崇高さ**を感じることができたのではないかと思いました。

後藤先生からの「危険ですので絶対に真似をしないで（させないで）ください。大けがをします。まず「守」で基礎体力をしっかりつけてからです」という言葉を肝に銘じながら、教員の「憧れ」を育てていきたいと思っています。

B 氏

シンプルで、深い、あたたかい、それゆ

えに厳しい、凛とした臨場感の中で行われた授業が目の前に広がりました。道徳教育の要たる道徳科の授業を紙面から実感することができました。

前任校を離れて、この上越の地でも他校の校長等から「道徳科の授業について前任校での実践を話してくれ」と依頼があり、来週も一件あります。それゆえ、自分自身でも授業をしたり、聞いたり、見たりしなければ、自分自身が磨かれません。後藤先生の「道徳科学習指導案作成入門」を小金井市の東小学校から取り寄せ、それをプレゼントして、「とにかく指導案を作りながら読んでください、読みながら作ってください」と言い続けています。

今、教育現場は、「外国語科」や「プログラミング」、2020 全面実施の学習指導要領を前倒しでやるかのような慌ただしさと浮足立ちの中にあります。「地に足付けて」と、先生のメッセージを読みながら思いを新たにしました。

C 氏

小林先生とは年賀状でご挨拶、お付き合いをさせていただいておりました。また、ご退職後に道徳関係の仕事を長くご一緒させていただき、懇意にしていただいた方でした。

残念ながら、小林先生の授業については拝見する機会を逸してしまいましたが、子供の捉え方、教師の心構え、読み物資料の資料的価値の重要性等、常に分かりやすく、親しく伺うことができ、今の自分があることに感謝しております。

当時は、道徳を難しく、理屈っぽく、教師中心（子供を語らない）に語る方の印象が強く、やや閉口するところがあった自分でした。恩師内海静雄先生をはじめ、道徳の本質を大切にされ、平易に語り、実践に努めていらっしゃる方々との出会いがあって、自分を道徳に踏みとどまらせていただいたと思っております。そのお一人が、小林陽子先生でした。今回、貴重な授業記録を先生からご提供いただき、改めて学び直したいと思った次第です。心より感謝申し上げます。

D 氏

小林先生の最後の授業、あのとき私も拝見しました。私が道徳を学び始めた年であります。ただただ、すごいなあと思いました。

当日、持って行ったビデオを家で見ました。「どうしてこのようなクラス、道徳授業ができるのだろ」と驚き、不思議に思ったのは子供たちの発言の仕方でした。当時の私のクラスで真似をしてみました。１～２年間は続けました。でも、やめました。真似できるようなものでもありませんでしたし、未熟な私の子供理解、私自身の教師としての力量とは全然違う人間力…、そう思ったからです。

今回、後藤先生が時間をかけてつくってくださったこの貴重な魂の伝承授業を大切にします。広瀬久先生のお名前等もあり、思い出すだけでじーんとします。

道徳も、人生も、「守」です。私も私なりのスタイルの道徳授業を模索し、つくってきましたが、「破」、「離」という境地は私には似合いませんし、それでいいと思っています。「生きる基礎・基本」を常に愚直に大事にしていきたいと思います。私の「基礎・基本」はまだまだです、いまだ未熟です。

道徳科がまもなく始まる今、先人の業績に敬意を表しつつ、道徳の時間というタスキを、その特質を大切ながら道徳科に渡していきたいと思います。

E 氏

いつも心を打つ情報をありがとうございます。感動しました。授業の内容にもですが、小林先生のお考えに…。

「心の教育は心でしかできない」－まさにその通り！！

教科化に当たって指導のスキルを磨かなければならないのはもちろんでしょうが、同時に磨かなければならないのは、むしろ指導者の人間性のような気がしてなりません。子どもたちの前に立つ人間に値する「よいオトナ」になりたいです。

「道徳の指導は教師の人間性で行うものです」という後藤先生のお言葉がまたよみがえりました。

この情報は本市の全指導主事にシェアさせていただきました。今後ともご指導の程、よろしくお願いいたします。

F 氏

後藤先生がいつもおっしゃっている「資料は子供の心を映す鏡」という言葉、小林先生の資料は大人の私もグッとくるものがあり、子供に伝える資料の大切さを改めて感じました。

小林先生の授業を見てみたかったです！私もその空気感を感じてみたかったなあと思いました。

そして、「いい子とは」のお話ですが、まずは自分を振り返って、自らを律してからだなあと…。子供にとって身近な大人が実践していかなければと思った朝でした。

今日も頑張ってきます。朝から気持ちのよい時間になりました。ありがとうございました。

G 氏

小林陽子先生は、自分が初任で松戸市立横須賀小学校にいたとき（昭和５４・５５年度）に、校内研究の講師として校内のクラスを使って授業をしてくださったことを今でも覚えています。自分は生意気盛りで、今考えると実に恥ずかしい質問をしたのですが、きちんとそれにも向き合っていただいて丁寧に答えてくださいました。その内容を今自分が後輩たちに伝えている番です。

H 氏

研究授業は当日の指導の工夫だけでなく、「自分が育てた子供をどうぞご覧ください」という授業なのだと改めて感じます。本当に、簡単に真似のできることではないと思いました。

I 氏

小林陽子先生は憧れの方です。ご著書を参考にしていました。授業を拝見する機会はありませんでしたが、廣瀬先生のご紹介でお話をしたことがあります。

「よい子を育てる」　やはり、これが教員の使命ですね。しみじみ思います。責任を持つ教員だからこそできることですね。道徳の時間は心を育みます。テクニック以前に大事なことが沢山あるとあらためて思いました。私もいろいろな場で伝えていきたいと思います。

J 氏

「魔法にかかったような」というのが率直な感想です。

生命尊重の授業をして一番嫌なのは、表面的でしかない素晴らしい言葉を展開の後段で子供が書いてくることです。身近な人を亡くした子の言葉には読んでいて身につまされるものがありますが、そうでない子のカッコいい、聞こえのいい言葉にはうんざりしますが、「では、どう迫っていけばいいか」と考えあぐねるば

かりです。

小林先生の授業記録を読ませていただいて、小林先生から「そんな小手先のことで生命の尊さを教えてどうするんだ！」と叱られたような気持ちになりました。

「身近な人の生死体験のない子にどこまで生命の尊さについて迫れるのか、無理じゃないのか」と自分の力量のなさを棚に上げて、分かったような顔をして諦めかけていましたが、そういう問題ではなく、教師が体当たりで、そして、心をぶつける姿勢で生命の尊さの内容を扱っていけば、出来るんだぞと教えてもらった気がします。

読んでいる途中から、「えっ、これ本当に１年生？？ えっ！鉛筆とかにも生命？そっちに行っちゃうの、えっ、いいの？　本当にそんなんでいいの？」と一つ一つに反応して読んでいました。

そして「自分を大切にしてますか？」の一文で、スマホを読んでいた電車の中で「うわっ！！」と声を上げてしまいました。さらに究極は、１人１人の胸に手を当てて聞いていく…。ため息しか出ませんでした。もちろん、いい意味でです。

紙上なのに、授業が目の前で繰り広げられているような気持ちになり、魔法にかかったようになりました。そして、「これ、本当に現実？？」と思いました。後藤先生が「小林先生の授業は道徳授業の究極だ。離の授業だ」おっしゃる意味がよく分かりました。言葉もありません。

小林先生の生命に対する哲学がしっかり確立されていて、そして１ミリもブレがない。このように内容項目についてのしっかりした哲学をもって臨まなきゃいけないと猛省しています。自分はかなり浅はか過ぎると思いました。

子供が主人公になる授業については、本当にそうだと思いました。そう常々思っていても、自分は全然出来ていない。子供が授業の主人公になるということは、「子供に何かを体験させたり、活動させたり、発表させたりすること」だと勝手に解釈して、満足している自分がいます。つまり、真の意味で子供を主人公に出来てないから、そう解釈しよう、満足しようとしているのだと思います。まさしく小林先生のような授業が「子供が主人公になる授業」というのだと思いました。

いい授業とは「資料と子供と先生とが三つ巴になっている授業」というところでは「そうだ！！そこだ！！」とまた声をあげそうになりました。

いい先生でなければこのように発言出来る子達は育てられません。先生に認めてもらっているという安心感、クラスの友達の安心感、学級経営の理想の姿を見たように思いました。

このような授業は目指したい授業ではありますが、このような授業をやりたいという思いだけで目指すのは本末転倒だと思いました。小林先生のような先生になっていくことがまず第一だと思いました。何よりもまず、目の前の子供と真っ直ぐに向き合って、教師と子供がお互いにより成長していけるように日々頑張ることが大事だと思いました。まずは、学級経営、そして道徳の授業においては、自分がまずはしっかりと価値について哲学を深め、何をねらいとするのかをはっきりさせて、ぶれない授業をすることが大事であると思いました。

とにかく授業は、小手先の指導法で勝負するのではない、子供と心と心をぶつけ合う気持ちで臨むことが基本なんだということをあらためて教えていただき、

さわやかな清々しい気持ちになりました。

K 氏

まるで、私が授業を参観しているような気持ちで記録を読ませていただきました。

小林先生のことは何度も聞いているはずなのに、とても新鮮でした。

まず、子供たちの反応がとても１年生らしいと感じました。のびのび生活をしているとこんなにも大人ぶらず、自分の言葉でお話ができるのですね。そして、「温かい命を大切にしていますか。」の発問で自分のことを素直に見つめ、できていないことも躊躇なく発言している児童の発言には驚きました。

「道徳は学級経営の上に成り立つ」本当に目指したい私の最終ゴールのような気がしてきました。欠点を隠さず、素直に自分を見つめ、語り、周りの人たちに受容してもらえる学級…。私は学習規律や学校生活の約束ごとなどの見た目ばかりに力を入れて指導していたように思います。

心の壁を取り払って互いに本当の心の交流ができる学級とは何かを考える機会をいただきました。これからも私の指針になるような情報を示してください。ありがとうございました。

L 氏

とても温かさを感じる授業でした。資料だけで心が震え、生命について自然と考えさせられましたが、小林陽子先生の発問でさらに深く考えることができました。

始めに、生命がどこにあるのかを温かさを頼りに探すときは、明らかに他者の生命に目が向いていました。それが、「自分の生命も……」と問いかけられて、初めて自分の生命も同等なのだと感じることができました。他者や他の動植物を大切にすることはとても大事だと思うけれども、それと同じくらいに自分も大切にしていかないといけないのだということにハッとさせられました。名人の授業は、児童だけでなく、大人も深く考えさせられる授業なんだなぁ！と心底感動しました。

M 氏

「道徳授業の名人」と言われた小林陽子先生の授業、ぜひ一度拝見したいと思っていたのですが、それまでついに機会が無く・・・、1 月 16 日(水)の最後の研究授業私も品川区立清水台小学校へ出かけました。

荒川区第三日暮里小の教員でしたが、担任していたクラスがインフルエンザで学級閉鎖になりましたもので、今考えると本当に運が良かったです。

（1 年生の子供たちは椅子だけの席だった。授業前、先生と子どもたち 37 名は音楽の先生が弾くピアノに合わせてオペレッタの歌を身振り手振りで次々と歌っていく。）

T　さあ、始めましょう。小林先生の声、聞こえなかったでしょう。でも今は聞こえるでしょ。腹式呼吸をしたからよ。腹式呼吸をすれば聞こえる声になるのね。（子どもたちは立ち上がって腹式呼吸の練習をする。）」

T　心を動かしながら聞いていてください。（資料範読。心に染みわたるような範読だ。）

T　どうでしたか？（指名はせず、子供たちが次々とタケノコのように立って発言していく。）

今でも鮮明に覚えています。先生が指名しなくても、まさにタケノコのように子ども達が１年生とは思えない発言を次々していく。本当に驚きました。本当に感動しました。これが、「本当の道徳の授業だ」

と思いました。

授業後に、どなたかが「どうすれば，先生のような授業ができるようになるのですか」と質問されて、小林先生が「みなさんはすぐ管理職になったり、指導主事になったりするけれど、私のようにずーと長く道徳の授業を続けていけば、誰でもできますよ」とお答えになったことも覚えています。（私は授業を続けずに、指導主事になってしまいました・・・。）

自分の「道徳の原点」「道徳の出発点」をもう一度思い返すこと、振り返ることができました。今日は本当に「良い日」です。ありがとうございました。

N 氏

教師と子供とのかかわりがよい授業を創っているのだと改めて感じさせていただきました。指導案はシンプルでありながらも、精査された文言で、如何に吟味された授業だったかが伝わってきます。

様々な指導法の開発が求められている昨今ですが、一方で、「もっと教師と子供とのかかわりを豊かにして学びを深める学級づくり」にスポットが当たってもよいのではないかと考えさせられました。

O 氏

小林陽子先生にお会いしたことは無いのですが、道徳の資料（教材）をたくさん拝見しています。どれも子どもの視点に立たれた、とてもわかりやすい心温まる作品なので、憧れの気持ちで教師になりたての頃から読んでいました。（道徳を専門に勉強しようとは思っていない頃からです。）

資料（教材）を作成するお仕事をいただけるようになって、その難しさがわかるようになったのですが、今だから理解できる小林陽子先生の作品の凄さがあります。道徳の資料（教材）は、普遍的なものであるほど「名作」だと感じています。江橋照雄先生の「手品師」、小林陽子先生の「おじさんの手紙」などがそうです。いつ読んでも心が揺さぶられる、そういう普遍的な作品をいつか自分も書けたら幸せです。

小林陽子先生の授業記録を読んで、授業は本当に「その人」そのものが表現されるものだとつくづく思いました。名人いわれる人の授業をたくさん見たいなぁと改めて思いましたし、資料（教材）を作成するときにはできるだけ簡潔に、言葉を吟味して子どもたちに伝えたいとも思いました。

子どもの前に立つ責任というか、子どもに何かを伝える（教育を行う）上で、教師自身の人間性を高めること、深めることが実は一番大切なことだろうとも思っています。

では、「それらはどうやって磨かれるものだろうか？」ととても悩みます。いったい自分で大丈夫なのだろかとも…。きっと、出会った人を大切にすること、一日一日を大切に生きることから何かが見えてくるのだろうとも思っています。こんなふうに考えることを哲学するというのでしょうか。

ぼんやり、のんびり、日々色々と夢をみながら生きていますが、自分が何をやりたくて、どんなふうになりたくてといった具体的な姿を具現化できるよう生きている時間をちゃんと使おうと思っています。

小林陽子先生のお話は自分を見直すいいきっかけになりました。ありがとうございました。

P 氏

「ジョンが…」の資料を読み始めたとたん、私には幼き頃、自宅で生活を共にした愛犬「ベル」との日々が蘇りました。私が小学校 3 年生だった時の冬に、生まれたばかりの「ベル」を譲り受け、家族総出で

育てた日々。大型犬に育った「ベル」との懐かしい、今でも心に染み入っている数多のいのちの記憶。そして、10 年のいのちを全うして旅立った「ベル」との別れ、絶望。私の成長とともにいつもそばにいた家族の一人が「ベル」でした。

小林先生が作成された資料に心揺さぶられました。いや、魂が震えたと言った方がよいかもしれません。子供たちの発言はどれも、自身にとっての「いのち」「生きる」ということを内包している内容だと感じます。同時に、小林先生が途中で問うていらっしゃる「お父さんはどうでしたか？」が後段の授業展開に一石を投じた核になっていると私は感じました。

また、資料を読み終えた後で、何故か「おもかげ」（浅田次郎作）が脳裏に浮かびました。1 週間ほど前に読み終えたこの本はこの資料とは何の関連もないのですが、資料が醸し出す読み手への染み入り方と「おもかげ」での主人公の生き様とが私の中で重なったからです。

この授業日は今からちょうど 27 年前、私が教師になって 2 地区目の学校に勤務して 6 年目にあたります。ちょうどその頃、家族として授かったかけがえのない二人の娘たちの養育を、受け持った子供たちに投影しながら過ごしていた私がいました。小林陽子先生の授業を、その頃の私がまるで参観できたかのような錯覚に陥りました。

後藤先生が再現された小林陽子先生の授業記録を、縁あって苦楽を共にしている現任校のいのち輝く職員・子供たちと早速共有させていただきます。ありがとうございました。

Q 氏

小林陽子先生の授業記録を読み、先生と子供たちの生き生きとした表情が目に浮かんできました。また、先生と子供の間に、しっかりとした信頼関係が築かれているのが伝わってきました。

小林陽子先生は授業の名人であるとともに、学級経営の名人なのだと思いました。この授業までの軌跡、道徳授業の積み重ねがあってこその 1 時間。そして、道徳教育は全教育活動を通じて行うということを改めて教えていただきました。

教師はともすると「1 年生だから」「この学年の子たちだから」と言い訳をしてしまいがちになります。小林先生はそのような言い訳はけっして許さないと思います。目の前にいる子供たちに向き合って、子供たちを信じて指導していく。だから、子供たちも先生を信じてついていく。そうした中で、子供たちは自分に自信をもって力を伸ばしていくのだと思いました。

道徳科への大きなうねりがある今、”形”の変化、つまり授業形態にばかり注目する人がいます。しかし、道徳の目標である「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ということを忘れず、子供たちのための授業ができる自分でありたいと思いました。

本当に究極の授業だと思いました。私はいつになったらこのような授業ができるようになるのか、と途方にくれました。ですが落ち込んではいられません、今は「基本に徹して学び、実践をする」、それを続ける中で、いつか自分なりの納得のいく授業ができるようになると信じて、日々精進したいと思います。

以上